唐故三十姓可汗貴女阿那氏之墓誌

（圖版第一〇圖　參照）

此の墓誌銘は既に屢々學者の考證を經たるものにして、陸心源の儀顧堂題跋卷十六に此れが跋文一篇あり、篇末言ふ所によれば、黄本驥及び王言も亦夙く之を攷證し、前者は古誌石華に、、後者は萃編補略に收めたり、西人にして之に注意せしもの亦た少からず、即ちヒルト氏は Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk の中に古誌石華より其の一部分を引用し、然も「興味ある資料なれども甚だ難解なり」として其の攷證に及ばず、シャヴンヌ氏、ペイヨ氏も亦之を知りたれども、ただ甚だ注意すべきものなることを說きて、其の解說に入らざりき、（Chavannes. Dcuments sur les Tou-kiue Occidentaux. p. 310）京都文科大學內藤教授此の拓本一紙を藏し、余に勸むるに之が研究發表を以てせらる、則ち篇首に其の寫眞を揭げ、知る所を以て下に記す、蓋し此の墓誌は唐の玄宗開元四年に戰沒せし突厥の可汗默啜の一女、毗伽公主に關するものにして、公主が國難を避けて其の夫と共に唐に歸順し、後玄宗の宮闈に入り、更に聖旨によりて、有名なる突厥の闕特勤の兄、默棘連可汗に更嫁せんとするに當りて沒去したる始末の大略を叙せるものにして、之によりて新らしき事實の知り得べきものは多からずと雖、既にヒルト氏、シャヴンヌ氏等の言へるが如く、唐代の突厥史料としては重要なる性質を有するものにして、然も西人の研究未だ此の如く、陸氏の考證も亦甚だ密ならず、況んや他の二氏の跋に至りては余之を見ずと雖、然も陸氏既に之を難じ